

自序

洞窟

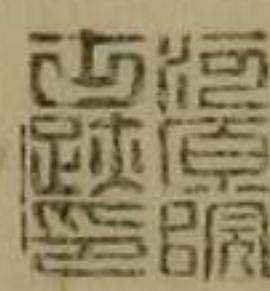
かふ哉れ新婦が梅を植ゑ向ひうそとみ升
あるあり源よ入りてくとく旗をかむる事かとも見え
舞がくやう化をうつ第を書くつまたと形の如きを
源乃姓ハ六孫王也ア多田の滿仲と共子將川純友
をほう角頼光を也をあく一方ハ抑ひかく處つて
大江山千丈嶽ハ仁王四天王と共平鬼あをゑ鬼のあこ
羊ひきわらふとくぬ名を竹ノ頼信忠常うそすりる以
前まんまほのすふとくも馬をく海を下て敵を安く

亡一ノ園すとおこしに頼ま義を十二の初花候する頃
もう奥北安信自任宗任うるむるを追捕はるゝ下で
かあく乃戦ひりてほほはまの河のきに北渴小源
せら弱ひどく敵を守らむは清水りんかく其詔軍北
渴をさへて石居あら馬すりかへり壺つてへにち乃
居様のやうく尔至共う拂してばかりあるあ源一かどく
今ト壺井より源貞任はくく源七騎の討がる遠山の
麻の香も恋小毛衣のまづくわちくから金兵を説ひ
かほもねあく一ノ奥のやこれ兵が乞出みの武則と共か旗を

あるや一ノひよ爾厨川北城を自任亡きとく首ハ都
のほと宗任ハはへとおりて八幡屋小伝ふす小源人九年前
たかひとと其後家衡武衡等とせとて無事あいぢましも
亦八幡屋行ひうそじてかあくれ軍をもみだる秋の風
弱ふ吹ワラたる小屋のぼくびみてくらうかく飛を
又経て野小故の伏竜りうとほくみかく唐とく往く往
ゆく家衡武衡が底へとくにあ代不かくとがせらか
後三年の軍どう八幡屋のそれちえきと多ひ何とくひ傳ふ
築れ梅毛の風すちかく今ハせうやうとがりぬけ文

あくまでもうみやう多くともかくともとまくをせの入れ
山あるの處れもくへんをたぶらか書るのえアソヘヒトの
よき代はとあさとつる／＼終り／＼享子和三北ヨリ
アソヘと乃す。余生の日も多事

秋 墓 納 離 害



目 錄

碓井貞光爲頼光朝臣臣下
頼光朝臣上洛酒田公時爲臣
洛中大怪渡邊綱斬鬼臂
土蜘蛛退治
弘徽殿女御薨去主上幸花山寺
花山法皇熊野巡幸
一條院受禪多田滿仲祝髮
丹波目代草馬頼光朝臣出車
頼光千丈嶽發向籠宮願書

酒顛童子退治
大江山陥城
頼光朝臣凱陣賜勸賞
頼光朝臣誅戮市原鬼同九



前赤壁記圖會卷之四

確井貞之あれぞ御内下

確井貞夫あれえ御内下
上総を守る頼えさんわるはより奥國の者但あつて國考と申入難
詣と改めしまに氏の紀ゆゆもろキ流に浮へあらじされえつ
けりやとゆくへん國とおこめ天下のまわくよみの旅立き即後と役取
ぞくわゆよほじ先秋又は仲冬の日も而仲え年國を雅に居とゆく
は事平至下乃功とゆきよされまく度き下部のあ櫛のとよあ一あとが
てが主下のまにあらむるに付裏うわぐとおひびくものとひまつたよ
がくと事序が一物うて主色三年十月廿三日乃早且又綱季武と夫子と
のとはとくらせても今其本氣りをあらむとばへ信列確井許とそしに從
をく構へたうるみ日晚素にひますぞ一ども獲わむ引車となりてひよとめ
りとく時分とて尾上より構一丈出度とれえ並りてく引組草分を唯

二刀足にて止く引上又まご猪の腹筋をかくに足らしはまくほの甚
又絆の奥せざる事れえがむつてうとうとぞうきかじ處と夜露引出
さうり人を乞ひと尋ね云れましのゆくゆが舊の名也後日乃と
よきいゆと殺豚口酒もあつたされどまづととく件の殺豚とある事
れえ解るばまびらかと聞自君へゆくと是の白されぬ因故彷徨
うううゆゆとよそく其の事も多とあらひあるびとがく
おもれはあらゆかる因由を申まことこそもと周の文王捕々々
ト一て曰わる所の者へ就勦虎罝乃に猛獸みやびに君に所と遺る
とすとすが黒くそと云ふはひき今朝の山爰見とてうと夫憲臣とは
し翁とよすと云と謂ふやされれまことに石子がたにやひ
ふりまも猿をやりし今ね處もうてるのを此上にあてて殺猪の臣と云ひ
ごろり本を里ゆびのとほひく室に信濃國碓井山とすり者たゞ



立者多く至りもを西うりふへすと推はるゆゆの幼者これより進みてアケルは龍
だる馬たるに伏えの主がくとも今又がくとすがくとすがくとすがくとすがくとすがくとす
とく武勇のきくめじかまに空でまくとあ圓は達すと已て三代を歴たる没
が母子のうなまと歌て西國流の歌作よお詠して汝と及け則母の二日を生むるに
寧く母は我より退を勧めうまびせんまつてはと及け則母の二日を生むるに
の外もみほれが我より退ひうる方にも給付く武勇の名が承し家とモニ
無良口是こそ汝が先祖と對く不孝行をばされと懲るや念く禮とくオマ
アシカのまみ直附にまごそ累々しがくが遺言紙よくせて胸中にうねくもくと
ゆく長弓にそく藝能よとくうするお力業を事業に替へばくとく遺言の
とく弓箭一弓紙弓をの事もおまともひられ十策うきとくせよ出
て麻猿と追まし諸もと射落すも及ばん石弓轉一矢ハ松の馬と繩よ縄と
かりくちうと度量を駆りくとく切磋琢磨とく其身を懲り立誓改善を励

キムレバモ別よカモトハ傍れられぬ人荒をまよとまくを嘗々と自真字をモ
亦ひく千口革の用自元服へくを蒙べらん事ととくにとく御
金を無うり祀ヌラアホニ給うとくとく即確井荒を則りとくとくとくとく
キムキム食かれの時うる號し穀生衣業として且事の人生とまくとくとくとく
和々きくとく給仕せぐやとくとくがく幽若と服をく其年からへきにあくとくわく
とく家もとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
七界の林うち十八界のそとくのとれい草すく今度は岐阜より北山殿に
七日未だれく丹心を盡する所が其志の深切うるて神事も衰れやと食え
差中れむる本院とがくわづれをなすもくのと羅さんがくの法施とくげし
酒すゆば車と甲冑はにがく相模園と慶く波海の私ますと上総園の私モ

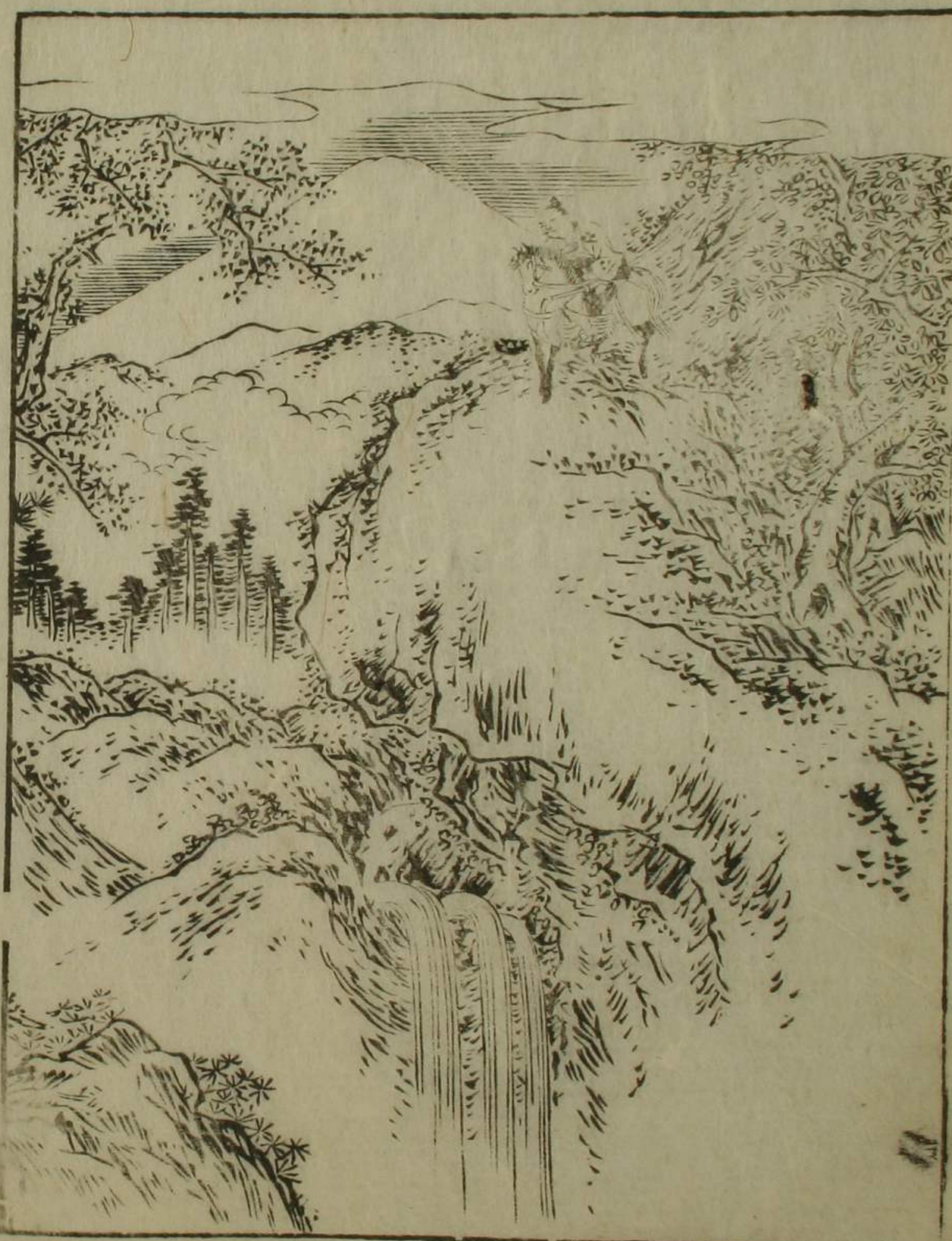
太守の御館に推番へて棄肉ともあまゐる約半身と足と三じ一義ある
男の腰刀抜きと會船もゆく門前能うもけはまく誰と聞見へ信濃國の
大うらが御内公へて一二のくつと圓業に今たるあつむ引てさかとくすら
ま待園で一二のくとめの假船後ひそひうトお度よこひうづとにあ面あつむを
んや仍其處も其處を紙かし林へ誰とふねとせきだ唯仍其處にも一二の
小引会やされ給はまどを彌忍のまほをぬごとくも眼眼き男の人をも
やひを流石をもとひひとちづくおはまく内又假船よくと語る源流園
やがと六郎とまのとての本あつらとさへ中でさへもとひうきうト紋眉と鬚
や身とあらと信別は假わる者とそぞ源流お領洋美も我ととてかうとるやが
名所にそぞ其公意してこそひがれと御内よもと一二の若よもとてよひ一室
相知る老ひあり仰あたもせよ矣をざすも傳はしとお面とて車の接と廻
居たうりとて不まじきゆかの男をね入とお面とみぶの男やタタか日と信別

雅井崎に年延くりひうるうまこのをあつて夏車と權とつゞも其人役うも
べ根知るのもつくづと憑へに方々うなれ空く未月とまろの下に訪訪の多
「百箇度の未湯と企されをうねきて則湯未の夜不お湯の未現と事あう約莫
並び御館(表)を日に傍くままくとひくのをすま奉と信別は
ぞやうるゆくと目と頭をもとと相く其人方骨極といひ今時君の御裏更に
方其函蓋の荷合せるて特とひくと早けると吉よとくとくとくとくとくとくと
範くとすまかとよる信別奇事とまひうどと真とよとくとくとくとくとくとくとくと
おもにかの男と説引とく御茶にまうと信別難うとく其頬魂のたのの
にあひて御茶をとおきくとあべき男をもと冬うされば少弔と安あひくはが先
ほてに代かと信別仕うまうと車西の僻地うよび所の木も其車にねよる

孝もうくひされば都の民をすこも何うせんと帝不在で御ゆく所井を先を即
角通と名あひてひそ守園もあぐさきとすむれす虞舜が土を曾
曇が子のじしよも始く帝堯に奉用すと仁座と施くと之耶。已有能列の事
業を成今て終尹に有事の臣士をしが殷の湯王に抑と政を補け殷六百季。育
其人賢のあと遺せり安も豈勇にきせば始く確舟の事無一子孫の二竊繁
矣と改えんと子細の育びじ行ぞ知る民姓を承りてからんやと即帝即
そ賜うる自乃席を乞とお謝りと皮かくむけう用鎧もるる全具の數重
内極嚴の體の小奥に付門もの盡尾の甲冑に刀一振らぬ祿よひると皆具
ね縁く因まみの縁つきがちと賜う利潤名の字と分て貞吉とぞとよとよと
和と励三枚を皮のひぬくに名譽の勇すと威けり
よく身く綱生をとめと仰頼えわほの御身と離さと枝枯耳目つゞくとお
和と励三枚を皮のひぬくに名譽の勇すと威けり

賴之於酒上流酒田之時為酒

保川を守頼えお居兼てひとせに年八月にハ征限先て上路あるがまくあ
うと避く真まの二月を政官廳トテ下文を賜て候付らる。さるわく急ぎ
上路せしむ。仕事下りがにや。二月廿一日御舟途あり。されば國のまちを以
てもと農民である。あもとあるとての漁舟は生儲く御賄を乞院に廻と解多。ども
帆車も。やかまきと真漆と。かとすて甚餘波と。情多からむ。を守ね換園。産
物と。はくはく。嶺。眺望。まへ。あへ。奈浦。冥暎。して。萬葉の帆。風。
又。所。ふ。と。ま。と。ぬ。れ。の。柏。ひ。く。林。も。え。く。傍。ら。若。葉。の。底。ま。ま。そ。う。半
力。ま。と。よ。う。能。と。み。く。も。わ。財。部。の。家。主。の。真。根。の。我。狼。さ。も。類。と。漁
にく。暫く。御。馬。と。ひ。く。逍。遙。と。多。く。う。後。船。源。流。と。そ。く。浪。星。と。ひ。く。進。義
ひ。く。や。源。流。と。よ。ゆ。の。烟。と。赤。色。の。水。去。れ。あ。れ。そ。く。内。里。方。た。よ
大。金。あ。う。ス。色。真。と。う。も。兩。浮。と。其。下。に。ひ。く。賢。人。の。漁。あ。う。く。う。と。れ。浮。の
あ。祖。娘。四。あ。が。水。を。辟。て。き。着。の。こ。次。岩。石。の。ろ。つ。源。と。じ。妻。の。呂。屋。真。



を率くる事にして、怪々して秋風不むるや。呂后が因縁のあひをも
附りて、其妻をあうけ、其妻と暮らしゐるまゝの事に、後をもどり
一室人傑の隣居となりしきりと、宣げ綱みるまゝ馬引まつまけり
まわと向に付く者を引くある事が、まうて、お庭と並下なまび風景をもたる
とくに、ある後日、も延てゆき、うなづかれて、施くもとを放ち、敵行もは
おく本気の馬とす。草堆の枝、五角を圓て、蹠て十八所が、あすそられ
怪の置原あり内に、秋子と是へて、六十歩の幅、傍に面し、サ可つて、あら
んが、まゝ、重ねたりと、遠居、うなづかれて、老嫗とよく沙幸ひ
誰と向され、急列刺史頼えぬほの階は、後も源氏御、すめこれと、上階す
ぐくよろこび、はせを拂き、と、其の御邊に、坐まつて、さ寝うき、
老嫗、園て、大守位して、林山幽屈とぞ、や、個が、回まわに、漫征、もさに、其まう老
嫗、その守其様を、望まく、世に、令度、も、誰もからぬ、也、秋ねつ形

不ふく件のを、形と、清引く、歩くうえを、後を、不ともうかひ、泥じ、出葉
と、平地の、とく歩ほして、を、すまふ、ひとぞ、うるを、すまひ、其おの、寄りて
と、累ねる、喰して、其の、姓名と、向ひ、老嫗、見て、いたの、る、ゆまて、まの、令度、葉
何と、ひく、射、せんを、す、其、輩へ、汝うす、其の、へ、誰、老嫗、曰、林す、うりとも、又
う一、妻、嘗て、ひ、中、經て、去年、と、す、かべ、一月、山、顛す、ゆく、寝じて、差
中、ひ、赤糞、多く、妻、通び、其、附、を、落糞、あ、も、聲の、白果、と、いふと、落糞、う生て、
去年、と、經た、う、長、ひ、と、立、そ、腰、と、腰、と、腰、と、腰、と、腰、と、腰、と、腰、
を、守、宣、へ、う、も、秦の、所、の、守、縣の、る、う、妻、劉圓、の、者、丈、ほ、の、附、と、見、う、妻
に、神、と、遇、の、時、と、高、電、睡、冥、う、と、之、往、く、これ、を、う、見、缺、孔、其、下、の、う、見、
て、あ、する、て、あ、う、遙、に、う、と、対、其、下、の、う、落、准、じ、て、れ、れ、う、う、子、ま、く、済、そ、と、う、
參、其、と、廢、と、帝、と、廢、の、る、廢、を、今、は、童、見、た、比、を、知、つ、と、でも、陰、連、の、ま、く、見、
ど、せ、曾、く、これ、と、か、び、極、え、あ、く、は、其、下、の、う、見、て、あ、う、極、く、極、遇、う、も、向、後、へ、極

えと馴じ心の又んがく恩ともらひ先を主ひんやと宣ひまぶた處あら東
ふと魔人かう兵あら浦と倭を守るを守め男にあら其威勢有るべからず
秋じ童とゆくとゆきせとそくもゆびき我わの本をもとて其至りを守斜る
すう今にしてみを守はれとおどせ御令の料にてきよまことさうる守斜る
らむ喜うる族の役被ふうじをあらき近傍の御盆とて賜てぐう後ま遠
拘ふとおも美玉まにあら匱れ韁て差うるを事と來く佐諸今とお買へと來く
すみ幸るに時をねうと彼うちを守安幸入らん能はく保法ありて會れ
面白誠にほに幸れ時をねうれ其名と後因時と名すぞ陳平張良紀信
英會とすも深ま武をえら勝に傑の上たれとうかす幸ありまくま幸ふと
限は供こそ須弥の臣天公食頃えの輔翼の臣に天子にて称するに徳と施て下
又威と振ひて萬國の士卒招うて頃どり其家と下糧を給ふと其國公す
けんに之下の名をて称すとまく

洛中太怪浪毛鬼斬鬼腕

未だはん去まれ秋の始よりゐぐのえをあら彗星焉て見にしづくらるる幸
う幸まくよると怪波うさびと五老也素のとく今年又延年のみ種もと
え怪まき中は老若と撰ど男女と嫌を人多く失ふてあら其ゑぬにても參ど兵
一兵に列てあら中に立とも立とぞおとぞおとぞおとぞおとぞおとぞおとぞ
おとぞおとぞも知ど其形末も知ど有不と聞ど傍く再びて詠が拂とて説ひ
ほし申却うアラぬまぐんとおとぞおとぞおとぞおとぞおとぞおとぞおとぞ
い候中もあら男女がううりと後はく幸強大にあく伶某處のこまうへどるる
おのるの貴族ニリ人モ失ううう郎てハ玉体に迫付まうへるるとど色を
うせんびくと忌想どとておほあれによく比敵ふより候多の傍綱とて
清涼殿と會場に仁王像と候する英雄の武士に活く林木と敬意固セム
べとく園の草木をよせらる其くはたまつ佐兼武元守源藏改佐波判官



日備事とゆきの日頃えはま守に親上野ち平維綱肥後守に維率
をま維幹阿波守小松保衡相模守橋敏貞河内守絶取行舟後守大に朝校下せ
て元千時其か武勇公名と見てゐる。彼の武士團とよんで禁闇の門と衛
る新ても洛中ある極ううぞうれ金全く法を裏説あつ先ト並ひけく神事の
御坐ふうえへる無事乙號の不ぬう且子細とぬ向く見て其頃太下才一ノ
博太播磨守安陪晴明と云々高ヤベキも経符らむ時時もやひえ文脅枝の
事の後陽頭賀父彦保憲肺肝うそく其たに通させり幸恵も宿令通成
ゆゑ現來のろとあらうと云ふと云ふがに耶ううひやうう冬う度の妖孽也
も小僧の幸にあれば山陽國守治里同く檍の幸にゆうの鬼女あつやまの魔誠
天定め御守ある云々のゆうじが能うに嫁娶うすとまうう鬼とみて嫁
と云ふ女をどう殺さんとく貴船の社に詔言うす後川瀬に二十七日ほり後
直承う記されど一念の鬼鬼服とゆく嫁と云ふ女其縁哉と荒む蘿籠

後鬼強ううそくすうにれ滅一あ字後檍の下に止作り御うに不孝者の居多
議右馬つ督忠文東夷西夷の追討使として義勇の如にあはうう稱功三にて
門くは素も行まて其がとひく眞志乃申れ死くもの怪異と見せしに
真之又と宥て空居の離宮と従ひより稍其念もづまうぬ能ひに其夫彼鬼女
と支婦の妻と云うもあ云々の恨と姑々と鬼女とゆく洛中と延びせら今いだ
性又うう従ひに年中排列西生教又長物檍と後で傍に檍狀の室を侵て山
傍ある後名の檍も云かぬに今い女夢と説くとゆく後檍の下に小祠と建
て榜娘又と従ひ云々鬼夢急納ゆく洛中の案堵み細々と云養うる餘
嚴重ううしも今まで晴ぬがや而一としてね遠うると云ううれ脚やと
寝せらじとく其往官とぞ聞にうちて禁門警固の武士の間に上総守源翁居
れ之に因達と云ふによろこび申教月とゆく漸く四月九日京都起と申
風雨の陽明門をち邊せらる其身を衣冠の下にあ暮合の巫女背長膝をとくニ

人せすあらうおゆのを力と革て彼魔治平の姫秋うのとほ海に望む御
みをうねり有る白玉店とちてひいくるおほく御そひを綱て時をえへ季をもひく
わ奥へく萬方に眼を賊く化生や草とはけろ其勢繁茂としてきとねてこ
へひきり御るに頼えまし冷泉院判官代に財中納言維仲の御恩女妻に
ごひくかせ一城いきる植る目にうえわらひんうつの名ひよ集まつて今へ申
じても故ぞ信濃うる本音聲の様のそとやうどと申じようつうぬき申と成
まくに詮うて上総守はくがさくらうくぬ事と經く昨日の事もぐに詮に
おうきへれどもや林ふをよ扇座やかへさればまくとくもひとくとくとくも
うもとが若くそんまうりうをあのみけ申はれも縁をふたう心並々くらをひ
まられがめに假死が耳にあくと大會く一茶不まきる和はそをまれる夜深く
ぬべ物に浴申ゑく委対にうきぐくおゆの更鏡が眞切とぞ掌せする綱も沖想
の傳うきハ慈と供とも奥ヤビを妾きは付の男二へおゆて彼和に行て細にや倍

御邊半とゆうてゆうきり一茶極川の原宿を湯ノ川の東の丘より移せうと入
とう女のあれれと月に耀く馨香青岐満城す姿貴うるう紅梅の半晝に守る
佩葉の袖よ絶妙ねんとも具せびとひうあくてぞれう個と様の西丘と通す
てやうづくからくと女まうまれるを奈良にあらはに使体へ聲くひがう
て賜ひうえやと別にげたやうれば個をとへうる當時治中怪異あくとくと下れ輩
やう法はく日本地の主もあくとてほえとひくと唯獨うれひに振舞なごと
とて道にうれきとひくとひ馬うる走りう易うるうれ半身そばうにとてうれ
がれくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
のれうもの方へもるに正統時へ二度がやどすとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

喜翁細て乾の方へ走りくる細筋可發せ件の接切を以て被空を鬼のよ
とすに転じる處へ小姓の走る回廊の處の上にさうと為鬼がまと切ましむと見ゆる
えひかく經回廊より跳りて髪若に身する鬼がまとかく食いだすと見ゆる貌へ引く
思てかばりて白蛇を圍みて生薦す銀の針とさうもやく身を以てゆき事トされば
類えたに驚きひ不ぞ議の事なまく安隱聰明とすの事と見ゆる事と同ひけ
ヨリ是と云はては爲せ一室深居の鬼女より靈氣の威儀凌駕す男女敵とつゝ皆
捕へて滅し希代の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
於く射と金長と引替へて王経と毒漢せしと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
腕に首と手と足と時に細が宿所を叩くべからずと云ふ事と云ふ事と云ふ事
於にあらうるが止つたと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
腕に首と手と足と時に細が宿所を叩くべからずと云ふ事と云ふ事と云ふ事
に云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
速に余がせくとも云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

うつまゆも叶へ底宿とて是の後月にあつたとまゝと云ふ事わざとも仕
也とやれ母國もとぞ碎くとちほく力がぬまと云ふ事と云ふ事と云ふ
生産せとすう後あくち古清と云うと云うと云うと云うと云うと云うと云う
たる而れ我と外乾ちる所に和氣と重んじておまじめ花き風とも申すと
半曉林すの故長の今後あくとさくと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
並びつて上緒守殿の沖内にほれ源流もとひまだ肩と云うと云うと云うと
にも景もととくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
るをやゑくとをいそ親子のゆの歎と云うと云うと云うと云うと云うと云うと
うとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
したとて墓うされ個と道理にまづまづかうと門を閉へて金にさう母へたは
東方行本のあはれ一供も七日の齋とてみだれましく有るどと向れへて
きまゆる林が有のまくと湯くまゆれと國へてか重と慎ひとあらうるやう

やのまともかげりと恨みをもつて御心守らんとあらば列刃
まつともあじそも鬼のむすめをうるわしく有りと云ふ事は多
御園で安きところへゆくも圓く射ぐるを七十月をもじる月をもてゆくと見え
えに入る母のひそよしとやらをも幸の胸にさへ飛くみじ曉へ云
とおもくつむじと恨類の見えられ射する鬼のもと見ゆるもれや母のあいと
おれにうち母お返しとおもふと完体とや鬼のむすめのやうわにとあらむ
み今をじめまづ和敷が威勇人に揚まざらる体れたわと容易擊破する
事ぬくやとぞととやうじとおもひされれ松の木とくわくの木とと
のとては直長一まあたうの鬼を室に上うて破風のやと跳びうち室にまを失
にうちそれより後殺さるのをばくじと破風とまことに阿房造にまるとや
御き鬼によどきうかくそれと七月の齋戒やづるととも仁王經のちよひより
てその身を別の子細もううつうきとこじ難切とべ鬼ノもふく

後鬼丸と改名せし者不_レ

土蜘蛛退治



喜門某氏族もつてに及ばず在東ノ武士諸國ア不名幸トニ席をあそひ
久留ミタモかくも三十餘日とほてはほど無うるれども少しあらこゆきを
弓に矢上りて伏て着病一くる者、ももももいぬびて用事入テ休クアれま
ねばともひも幽うる燈の下に就て款々未方初まことこかくもとひ寝
きても一條風アニ是未久く三十日餘をも居たゞまひがたてそひづく
きからぬとどうあらむるかく麻ア夏もあく理も見えぬゝ誰ももす哉
脊みがまきや骨々もがたり黙ア多まひて志也もとみじめしやくあしく
ろへ眼とひいたゞく千葉ノ新トウノ傍於あくまくいふやれえを地にゆ
ぬ一キミをも向立とばなし後や誰ひそまうかく涼すに及ぶく我と若ひま
せらすやまちん目に浮く様アニシテ身とてあらんれども
と秋のそりとてすまに千葉ア繩と櫛と觸んとせまうるれえを破
紀アラ精死ぬれども机よ立ち車の縁たゞかくぬさおに丁と切ら切つゝ化

其まに形を失くあらうと刀青にあらうては多至リ者ども休むと
まくまく仰てのひつるどとるやうに頬えをもくのまくもくのまくも
こにたまつ射履原保留ハ右承をま残る男はく極之極はく舍オ深宿寄
頬親ア母方の叔父タクアベれえにもとじて、かくうされば全般の邊御令
吉村松原左近なるがまくはと事もく左席をすらに燈臺の下にあそ
ひて血湯よく妻の陸より置アリヨテ流とくも思え化生のまくべ
も寒も血湯もとあぐだ仰て刀身の辻とえにかけめだ血の流みて
仰あぬたもくやけ方難有能の者とぞくうけ血の辻とぞくう其あつて
りも詳説モゼムトモされられればれえ独どとみのあくまくもじまにほて
今ねぬとあく遼とくも血が返く行をめにかせの社アラシムスのうる様
てキシムとく血の返止くもれれること在西行場の半よ敷てやくとくわ
とあま森もくと様のようだよとひく枝退く金うつ姫とくわ

平地立てたまにてて大の面うちより狼狽する者ありと
人の勇士と云ふ者ありて引くを内する癖者もあらずと
記す。又其の筋のたなたなよしと百七尺の脚のかくらと曰ひき
眼の後の筋に毛を咲かし時々見ゆく千筋の筋と傳ひてこそ爲さんと
巡遊する所の止まりとせば九十九ちあつて眼よりゆるがの者に爲さんと
トモアベキとぞのく一度よ登とよりて猶御んと延びて九十九株ひきまは
一粒の筋のれきすうることをあげへつる足と傷とく創傷とくをねぐら
に天王の者とも勤じて揃合ひて保留物の背にあすと獨に身もろに懶に
てやがく坐とどかぬりかくらをいた其狀もぬ方に歌くス活と引て歌
さればは未の貴賤徧に隠くとんわー完いじかく奇美の曲者とかくめうと
と人ろのまにあはととまうなとすらがてれえねほのあに引くとくられ
ば安からぬる是がのねよ詠と二十作日懸されること不名様なき入路

に曝けしとくはひさればやぐく鐵の串よ坐るをくらに立てどとれど
かく蟲類の精靈の不あにもかくの先蹕わくやとるゆるにむく人向の焰火
神月を般余度と自皇の耶位に年に紀伊國名草於る村の林に長ニヤ候
アガツムアリ足を長くカクアヌクアリ網とくとく數里にそく往來の人々
殊害に作生ても官軍勅命とあつて獵の網と張ア鐵陽と拂くに方よ
前
アゲアベジ迦珠通よ殿されど其の身分にて繩とひな其後十二代足度要代
明之御子の御子二千五百羅紫の無量寶とくら底を寧退伏のるに行ます
岐河周防國の朝敵と貢賦とく豊予和國とてうあけ國の先主と主迦珠持
て夫人と母さう其國の者もととくと責められど人の換ざるがうに
謀もろと往がうると自首の個と活くつては處ひ敷くかくり足と
もの餘の人力となくやうするが今かる強盜の名者伏ス人の勇士活
捕りしてとあ代もそれほに名譽缺く称美せぬからうるましが嫌を

くもまう
豫謀切丸と改名を鬼丸豫謀切丸いづとも其の功雄あつて一家の主を自ら
天下の頂達ゆう

うたでしのじよこくきよのゆゑをせんじゆく
弘徽殿女御薨去主上哀悼ひすま

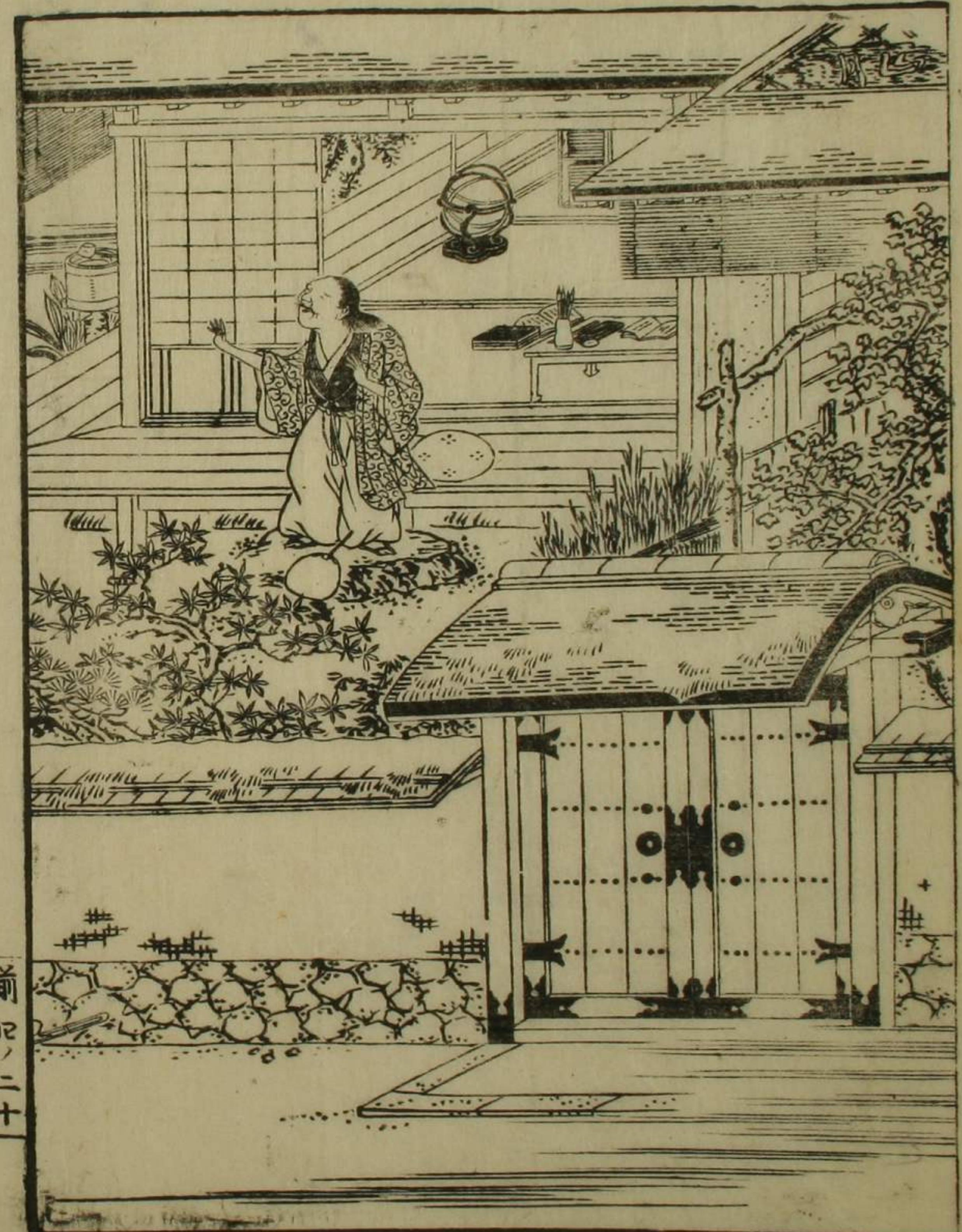
捺あく山蹊往の頃う人の多安とあまく納く后妃とすよ其一人の箇白
頬ほほの直恩女よ一人へ御宿する平親王の御女今一人へ納言着るねえが女
タラつとも空をたゞい帰にとく林のれぞのぬまのヌメ艶うるも直未重
いづく詠と同ドうせきとが樂にとば月見る花の美眞と一時うみあむにしる
をくじく主よおどご御そく食うとじうべ飽はく鰐見よやう延次頃沛も
君意をうづび誰う嬋娟をあくよもおうじうじうじうじう
相あえが女極すとまくへ除虫にあくよもおうじうじうじうじうじう
そぞれうる涙よあくぬがせまくようじうじうじうじうじうじうじう
脚心もたゞくあくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく

まぐらの内に腰もせの巣も包むたるの内
亞相もやく辞すまれましても被奉度多くもれ
やがく弘徽殿に詔され候ひうそうち底より
智化の忠臣の傳とも寄り且てまう日の暮
きに秋の夜の時やねにわれどうごちんくもくじ
ぞひ世の外にもと柳に二人の后妃再びれ眼と見
欽宗より雨に深と帰ふと天宝年中は楊家の人
宮の粉黛顔色うるま千の官女後に身を起せる
て解ぬ思の姫つじ跡の余の念の念のけづく
かじ下に弘徽殿の安門御令地例をじと圓丘
まつて露の森をうなぎとくにうなぎもまた毛
ほくはまく春も暮れゆるなまくにまくられがま上
山勢もさかがわ一也

本中も中も君より御多のま傍らる僧ひとく仰加ねる事ありしも直
ふうかく時々かびてくへり周身に汗と流す夏寒のじゆはか内も人をも見
知らぬがもあつたものいひかくそつだらうとまよひ止上ふけ形器と仰坐す
てゆくと處あどあされ候も玉停めをさうしてもと天地に仰仰れかへほれ
どもまよはるの所をうそと経てかれをへりうきの御うがみ奉るを直
仰非のあまうに脚んぢやねくらをまく懶に宿すと、そをひき仰及
上皇泉もからねねの脚病あつてまご念をかへまくらにあ今又云承くと
て左の近臣をぐに練慰まつたれもまた仰思歎止せりば剝御旅下
てせとて厭をうなぐと仰かねさせはゆくことであらむと脚ひじくそ
内くの便さやうかの三人の后妃まで能く嘗みき仰行ひうり西にまく當せ
も原かじ弘徽殿といた脚外にもあからず常有の脚病をえまをまうと
私語アタラク雅ナよすもう今だ弘徽殿の女御のがまくすうがの三人の

后妃まの内く呪咀うへるをくと廢因に至れば大に迷惑あつてアヌル
流氣にまこととされども人にを將くせうへく二人ともに宮中と退却をうへ
タムトマされば年をう月従くも弘徽殿の仰てと跡をうへまくと難情
にうる脚痛襟に復脚廻しの引糸をうへ萬機をひたてもうく肘をあて
さうをうじと雪も難にうこうびとるも腰が重きを知るがゆかとはまうわ
にあがへり

危音ともとへも入らず梅乃花はひうへせにまくとてぞうる
と仰は起あつるも仰かほしこの數う曳地襷を拂のるにちとくとて次をうへ
経度涌すくろくらぶく脣を日くはまく年をうせかじあくとがだ石
かりたまども迎門の遠と狭うゑとく仰毛もあをまうくつりくとく參見し
人の其月酉日戌にもうじと佛事供奉をた當せく實に二年六月廿一日夜
計に参合乗と傍の巣へうと仰供にて是日觀廻の小内うちをう



出御おへたり御身の事うまだ御輿うぐも含むせざうされば流すの御身
行はくたうこそほのみやうひうもおまあつてぞそきを退避すに寺
にと御寫うそ絶交たゞせうひくが爲む時聞きも庭に風とも雲を過ぐ
いまと麻もやぐ居らうが月東より上に止く秋已にこうたるはす庄院の繪
重高冷彫珠松郷音疑立馬童元懸流星まれをと全てうつる財又くあらとれ
どり桂やあうき佐景に見とたま裏えをとくろに嘔きを唇にしがまくので
えとんとたに驚きくらう急びくあら不只や多氣かとと是坐れを作
連るのねぐらとくめる怪異があうるぞ魚身内とくらがひまんくねれも
とく放ざ瓊ひしらうりと山門外ようけ接と慶園あつて完怖の晴明が西遊
五官中はく汝法せざ遊なとまくや本をと尋ねさせふ役ともやまううと
てあり御足ともあられなくうらがく晴明とあはく年過てまの振とる
ナれども宮女多夜も帝の見ゆをえぬともかく晴明が付て立御庭
とがへとう

御作駕やしひがぞ殿く宮金公喜くゐまゝせられもくに御庭不毛聖
をきらうるに天觀音の大唯今このやうるまゝに細ひだらう供せ
うるを供せしむへたる日來の手三とくびをうひだはととく近づ
の女神多衣部條波とすとまうははむま宮中にひじたはまうとくを十度
八辨と傳へ奉内とくとくと圓章をと大と清らでくじくわなま
たる計々圓肇腰輿もとづに御車舎はあづらればまく御歩行はま
とくとく移しと十方分く御在とぞ水をこれとくとく涼半くうとく
とがへとう

花山は曾野風草

被そしめて後日上ひ化ひましやまくはえらればはく追ひゆくと
かれもとれ様とあらう御は偉と金に考まうと御在延儀二年

多貴也とて又あらう家に海と商御身は急在事公厭離へ津多乃強敵も
ひそそ有められ却難操といふたゞぞもがく
一條院主軍萬仲の居延發

一絶院主禪滿仲勸馬征發

されど、秀融院房、白皇子、仁親王、先帝、秀忠御跋作の時、秀忠を宮に立す
寛永二年六月廿二日儀に至る。是とては七月廿一日御即位。今年正月度
セキニ絶壁落れ之を回瀬仲納庭を實和は室山御庭飾の砌石より集じ
奉り。それより之を以て御幸はく家經と殿庭を修復せばも
多幸とひきむる。是等、向にあり、金縫去事の具とゆうじて、天禄社領
蘿蔓のをあつて、御内勅許よりして、是とては年月三十日を以て今者
時、言にあつて、信頼と利権の勅許を蒙り、下を立て、改め年号
徳政院。是れを元亨と名づけ、馬に車とし、きぬ家の傍ら、年來の患難にむか
あれど、之を勤めうちかづきあつても、もはやいたはくと、終始無外。



滿仲よりおぞまかどく多聞にかられるが連中を覺えど立てく横川の源信傍
近院にましくる。おどり拓ドヤされむるがくに寛和一年八月十四日滿仲御宿ぬ
也。其心傍れまくとぞ拓ドヤされむるがくに寛和一年八月十四日滿仲御宿ぬ
度の儀則々く体居盤歎々く衣冠正くは美ニ時院に入佛おこなひたと供ド
吾と遼じれね奉教へあひゆくとくに御金才不運とあら一族すぐる
内陣と列座あう舊代が接の事無く外陣に據と款と並びて御信房都
威呼とて滿仲の援にまく影に冠と號を賦文にの名と通し利刀と兵士と
御方ふ立誓と種と髮と利刀と御信房の名號と後で秋門の儀の法衣を呈し
は名不滿まで歸すと美幸のをまたに至て喜びて解き終う年七十有二
にも滿仲の成る日本に至るたる風儀とまく列座のとくにててく御信房と會
多のノタリノ御玉座和もひて利發のとあじて日本に法たと慶すと其御儀代り
老臣被事まもんが切く内トハ結縁とまく今自けして滿仲新發をば見
三時院と方の後れとしてあらひをばへくる

